

昭和 文学 全集

17

椎名麟三

平野謙

本多秋五

藤枝静男

木下順二

堀田善衛

寺田透

昭和文学全集

17

椎名麟三

平野謙

本多秋五

藤枝静男

木下順二

堀田善衛

寺田透

昭和文学全集

第17巻

昭和六十二年十一月一日 初版第一刷発行

著者—上林暁、和田芳恵、野口富士男、川崎長太郎
八木義徳、木山捷平、檀一雄、外村繁

発行者—相賀徹夫

発行所—小学館

一〇一〇一東京都千代田区一ツ橋 千自三番一號

振替 東京八一〇〇番

電話 編集・〇三一一三〇一五二二六

業務・〇三一一三〇一五三三三

販売・〇三一一三〇一五七二九

印刷—大日本印刷株式会社

製本—大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙—三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568014-8

©IKUO TOKUHIRO SHIZUKO WADA

FUJIO NOGUCHI CHIYOKO KAWASAKI YOSHINORI YAGI

MISAO KIYAMA YOSOKO DAN AKIRA TONOMURA 1988

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

椎名麟三 5

7 深夜の酒宴

31 重き流れのなかに

57 神の道化師

80 美しい女

平野謙 175

177 島崎藤村―人と文学―

262 ひとつの反措定

265 「政治の優位性」とはなにか

272 女房的文学論

280 私小説の二律背反

295 徳田秋声

322 尾崎一雄・中野重治・伊藤整

355 肅清チヌカとはなにか

本多秋五 367

369 芸術・歴史・人間

380 捨子

383 『白樺』派の文学

423 宮本百合子―その生涯と作品―

443 無限に満たされたい心

450 有効性の上にあるもの

455 中野重治論

462 「占領下」の意味

466 殷周青銅器の魅惑

470 神なき自我

「ヤキヤキな青春」より

474 三島由紀夫の割腹自殺

478 「無条件降伏」の意味

484 江藤淳氏に答える

藤枝静男 489

491 空気頭

536 一家団欒

542 私々小説

548 田紳有楽

599 悲しいだけ

605 庭の生きものたち

614 虚懐

木下順二 629

631 夕鶴

644 子午線の祀り

695 本郷より

堀田善衛 761

763 広場の孤独

811 方丈記私記

901 後進国の未来像——常識について——

寺田透 917

919 成長の要求

925 バルザック断章

935 透体脱落——「正法眼蔵」について

947 小林秀雄論

962 和泉式部論

979 朔太郎管見

986 バロックの精神

999 ポール・セザンヌ

1031 わが横浜

1039 ことだまの運命

1044 戦後派文学

1051 道元の思想的態度

1057 作家アルバム

解説

1065 椎名麟三……佐藤泰正

1069 平野謙……飛鳥井雅道

1073 本多秋五……中野孝次

1077 藤枝静男……饗庭孝男

1081 木下順二……中野孝次

1085 堀田善衛……清水徹

1089 寺田透……阿部良雄

年譜

1093 椎名麟三……斎藤末弘

1097 平野謙……編集部

1101 本多秋五……紅野敏郎

1105 藤枝静男……川西政明

1109 木下順二……宮岸泰治

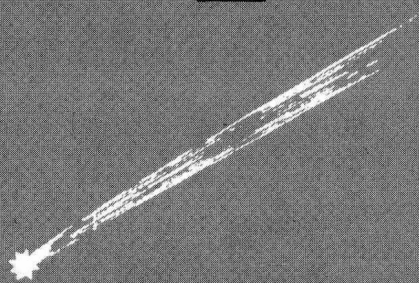
1113 堀田善衛……久保田芳太郎

1117 寺田透……田邊園子

1122 底本について

1124 用字用語について

椎名麟三



深夜の酒宴

1

朝、僕は雨でも降っているような音で眼が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それはスレートの屋根から、朝の鈍い光線を含みながら素早く樋へすべり落ち、そして樋の破れた端から滝となって大地の石の上に音高く跳ねかえって沫をあげているように感じられる。しかもその水の単調な連続音はいつ果てるともなく続いているのだ。ただこの雨だれの音にはどこか空虚なところがある。僕が三十年間経験し親しんで来た雨だれの音には、微妙な軽やかな限りない変化があり、それがかえって何か重い実質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ単調で暗いのだ。それはそれが当然なのであって、この雨だれの音は、このアパートの炊事

場から流れ出した下水が、運河の石崖へ跳ねかえりながら落ちて行く音なのだ。

だが僕は、このアパートへ来て半年余りになるが、朝眼を覚すと、それが下水の音であること知っていないながら、どうしても雨が降っているような気分から脱することが出来ないのだ。それほど僕のいるこのアパートには、あの雨降りの陰気な調子が建物全体に沁みわたっているのである。この建物は両国の運河沿いに焼け残ったただ一つの倉庫なのだ。このあたり一面の焼け跡には、バラックがあちらこちらに建っているのだが、その手軽な建物とは対照的に、この建物は現実のように重く無政府主義の旗のように黒く感じられるのである。運送業をしていた僕の伯父が持っていたもので、それを伯父が終戦後アパートに改造したものである。

全く部屋にいと、井戸の底にいたようなのである。僕の部屋は四畳なのだが、押入も戸棚もない。そして天井が思い切り高いのだ。ただ一つの明りが、手の届かないほど高い小窓からやっと部屋のなかに流れ込んでいるだけなので、昼間でも薄暗い。しかもその二尺四方の小窓には、驚いたことには、鉄の格子がはまっているのだ。勿論、倉庫時代の窓をそのまま転用しただけなのである。両方を隣の部屋と区切っている板壁でも真新しければ幾分薄暗さが救われるのだが、それが強制疎開のときの取りこわし材なので何とも救いようがないのだ。そしていつも冷々したかび臭い空気がよどんでいて、それが着物を通して僕の肌に沁み込んでいたので、この間も街を歩いているときに、ふと冷蔵庫の扉をあけたときのような臭いを自分の肌感じて憂鬱になったことさえあった。しかも湿度がひどかった。寝るときに蒲団の襟が首にあたりとひやりとして不快だった。ときには原因不明の腐敗した糠味噌のような臭いがその湿度にまじって襲いかかり、どうにも堪えられないときさえあるのだ。

ことに一日中ほとんどに雨に降りこめられているときは、僕は全く息づまりそうになる。刑務所にいたときでさえ、僕は窓から雨のしぶきを胸に吸い、高い塀の赤煉瓦が雨に濡れ

てわずかに赤味を残した醜い泥色に変わって行くのを意味深く眺めることが出来た。春になれば、鉄格子と鉄網越だが、塀際の乙女椿の咲いているのを見ることが出来た。だがここでは僕はただ部屋のなかをうろうろするだけなのだ。どこから外を眺めることが出来るだろう！ 二尺四方の鉄格子の窓は手を伸しても届かないのだ。僕は最初のあいだ気が狂いそうになって、窓というものがあるとすればここになればならないと、そのあたりを思いさま手が痛くなるほどたたいた。僕は普通でない特殊を忌むからだ。だが残念なことにその外壁だけはコンクリートで出来ているので、ただ僕の肉や骨が空虚に鳴るだけなのだ。そのときはきつと刑務所の病棟に半年近く入れられていた狂気が再発しそうな予感に襲われ、己むなく高い板壁に凭れて坐り込みながら、ひっそり雨を聴いているより仕方がないのだった。だが今は僕は組にのせられた鯉よりもおとなしい。風が吹こうが雨が降ろうが黒い運河に舟が通ろうが、ただひっそり高い板壁に凭れているだけなのである。その板壁の僕の頭のあたる部分には、頭の脂が黒い染みになって沁み込んでいる。

僕は元来臆病なのだが、それだからまた陽気なことが好きなのだ。誰かが僕に親しく話しかけて呉れたならば、その人と楽しく笑い

合うことも出来ると信じている。だが、僕は昔共產党員であってしかも在獄中気が狂ったという理由によって、アパートの人々は僕の顔やひとり言を薄気味悪そうにしているだけなのだ。勿論人々は僕と挨拶は交して呉れる。ことに今日はどういう挨拶やお天気の話などは、挨拶のなかで一番重要な深い意味をもっているのだから、僕はそれだけで至極満足している。金融措置令がどうなるかが、食糧の配給が遅れようが、そのような話題は僕の一番無意味な話題だ。この点に於て僕は十分形而上学者の資格があるのである。だから今晩米がないと訴えられても僕にはどうしようもない。どうしようもないから憂鬱になっただまっているより仕方がないのだ。だが人はその僕を冷酷だと考えて、そこにまた僕の過去を結びつけているらしいのである。

このアパートの人々は僕には古くさい昔話の人々のような気がしてならない。自然主義リアリズムとかいう小説を昔読んだことがあるが、そのように平凡で古くさくて退屈で、それだからその人々の生活を考えただけで陶酔的ないい気分になることが出来る。たとえば僕の右隣りの部屋には那珂という荷扱夫の一家が住んでいる。その妻は四十五、六の身なりを構わない女だが、十年も喘息をわずらっていて、最近余り堪えがたいので医者に見

て貰ったら、胃も悪く心臓も悪く肺も悪いということだった。しかし彼女は寝ても居られず一日中ごそごそ立働いているのだ。彼女のいつもはだけている胸には鎖骨がとび出して、肋骨の数えられる青黄色い薄い胸板には、しなびた袋が醜くぶら下がっているのである。そして彼女はそれだけ胸へ手を入れて始終ぼりぼり掻いているのだが、それが何かの虫がいるようでひどく不潔な感じがするのだ。その上咳をしては、ところからわず痰をはくので、肺患かも知れないし第一何だかきたならしいからというので、このアパートの隣組の人々は配給物に手を触れられるのを防ぐために、彼女の病身をいい立て気の毒を理由として配給の当番を免除しているのである。

那珂の妻は、いつも困ったような泣くような声でゆっくり話すのだった。その話は大抵自分の夫と十四になるひとり息子に対する愚痴に尽きていた。その言葉の調子は、まるで瀕死の病人が遺言でもするような大儀な哀れっぱきに満ちていて、それが息子への口小言となると、文字通り一日中統いているのだった。子供が口返答するときはその声は高まり、そうでないときはいつの間にか夫への愚痴になり、それを子供相手に繰り返しているのだった。彼女はいつでも自分の言葉に涙を

流すことの出来る他愛のない感傷性を夥しくもっていた。彼女はその夫故にその息子故に、世界中で一番不幸な人間だった。そのためにもまた人々から軽蔑されるのだった。そして彼女はこういっては涙を流すのだった。全くこのような感傷性は我慢がならないものだ。

彼女はアパートの人々に対しても同じ調子だった。彼女は会う人毎に愚痴るので、彼女の家庭の内情はすっかりアパート中に知れ渡っていた。彼女の夫は窃盗の前科が二犯もあった。そして彼は家族に菜っ葉だけの雑炊を食べさせても自分は米の飯を食わないと承知しないのだった。殊に三人家族一日分の配給のパンを一度に平げて、そのために自分たちは一日何も食べることが出来なかったというのが、このごろ一番多く繰り返される彼女の愚痴なのだった。しかもその子には子供らしい盗癖があつて、絵本を持って行つたと誰かが苦情をいいに来ると、いつもの困つたような泣くような声で、

「全くあの子には呆れているんですよ。わたしのいうことなんか一つもきかないし、ねえ、お神さん、うちの子はどうしてああなんでしょう？ それに何しろうちの人の兄弟は、みんな手癖が悪いんで、あの子もうちの人の方の血に似たんですよ。……」

と物憂さそうに訴えるのだった。そして愚痴がはじまり、夫や夫の兄弟のために自分はいかに肩身のせまい思いをしているかということは何時間も話しつづけるのだった。しいには苦情に來た相手は自分の目的などはどうでもよくなり、彼女を慰める自分の言葉に疲れ果てながら引下つて來るのだった。彼女には自分の苦痛が大切なのであつて、他人のそれは少しも感じないのだ。だがそのように愚痴る彼女自身も、今迄に幾度となく、炊事場に置き忘れてあるようなものをだまつて持つて歸つて來ているのだった。

僕の左隣りにいる人々も僕にはやはり重い。書くのも大儀なくらいだ。戸田という夫婦が住んでいるのだ。その妻のおぎんは僕の伯父の仙三を助けて、管理人と女中の役目を果しているのだ。彼女は三十を半ば過ぎていたが、左の眼のあたりが何か脹れている感じで、そのためにふと顔が歪んで見えるのである。彼女は勝気で働き者だ。廊下を掃いたり、やもめの仙三の身の廻りの世話をしたり、アパートの配給から菜園の手入まで引受けながら、その上夫の面倒まで引構えているのだ。彼女がアパートの人々を無作法に呼びつけるのは、このような疲労も原因しているのである。

だがこのように忙しいおぎんでありなが

ら、隣組の配給やアパートの用事で部屋部屋を訪れるたびに、大抵一部屋で十分も二十分も話し込んでいるのだ。それにはそれ相当の利益があるのだ。つまりいろんな話を聞き込んで聞取引をする機会があるのだ。いろんな品物を手に入れたり売り捌いたりする機会があるのだ。だからこのアパートでは彼女が一番裕福であるかも知れない。アパートの人々は、彼女が余りえらそうにしていると好感を持っていかなかったが、面と向うと彼女には頭が上らないのだった。

だが夫の戸田も自分の妻のおぎんには全く頭が上らないのである。戸田はおぎんより五つも年下であるせいとか、おぎんには奴隷のように服従していた。彼は謄写版原紙に製版する仕事をしていたが、二、三日机の前で鑄の音をさせていたかと思うと、すぐ倦怠を感じらしく、映画を見に行くのだった。だから一月を通ずると、割のいい仕事なのにその収入は家計費の半ばにも達しないのである。おぎんはアパートの人々の人に知られたくない秘密にも通じていて、人々の弱点に少しの容赦もないのだが、おぎんが一番我慢のならないのは、男の生活的な無能力だった。それではないながら戸田に対する態度はそれと矛盾して、かえって戸田の責任のない非實際的な性格を愛しているようなのだった。若しこれが

他の男であつたら、それが誰であろうと臆面もなく、「あんたはだらしがないのね。それではお神さんが可哀そうだ」とやつつけずにはいられなかつたであろう。また彼女にはたしかにそれだけの資格があつた。彼女は立派に家計を支えていたばかりでなく、将来のために貯金までしていた。彼女はバラックでもいい店を建てて昔のミルクホールのようなものがやりたいのだった。戸田がこの妻に対して頭の上らないのは当然だった。事実戸田のその妻に対する態度は、罪人が裁判官に対するようだった。彼は始終自分の非実際的な性格を呪つていた。しかしどうすることも出来ないのだった。

永らくこのアパートにいる人でも、戸田の顔を知っている人は少かつた。彼はいつも部屋の隅にひきこもつていて、机の前で鑢やちりに鉄筆の軋しんの鋭い音を立てながら仕事しているか、寝ころんでぼんやり空想しているのだった。彼はアパートの人々に会うのを極度に恐れていた。便所へ行くにも廊下の人の気配をうかがっている有様だった。だがたまに人に会うと、うろたえた挨拶をどもり、臆病そうに眼を伏せてそそくさとその人から離れるのである。その戸田は全く自分を生きて行く価値のある人間だと少しも思っていないようだった。それはまるで全世界の人々の非難を

一身に負うているようだった。

疲れたつつけんどんな声で人々の名を呼びながら、配給を事務所へとりに来るように伝えているおぎんの声を聞いていると、僕はいつも深い絶望的な氣分に襲われるのだ。また隣から聞える那珂の妻の鋭い連続的な咳や、泥棒のように緊張した顔で廊下を便所へ急いでいる戸田に接すると、僕はまるで永劫えいけつの前に立たされたような憂愁に陥るのである。だが僕の部屋と向き合っている部屋にいる深尾加代という若い女だけは全く堪え難いのだ。どんな不幸でさえも彼女に印をつけることは不可能であろう。僕はその女の鼻にかかる甘えるようなそれでいてどこか遠い声を聞いていると、いつも重苦しい嘔吐おうとのような氣分を感ずるのである。

おぎんは加代に愛想を尽かしていた。女学校を出ているのに配給の当番のときは必ずといつていいぐらゐに計算を間違えておぎんや皆に迷惑をかけるのだった。そして若い男がいつも入りびたつていてあたり構わない笑聲が聞えていたし、配給物を受取る金さえないときが多いのに、いつも牛肉を煮る匂いをさせているのだった。加代がこのアパートに来たのは仙三の關係からだつた。加代の母は仙三の妾めかけをしていたことがあるのである。

加代はまだ二十なのだが、彼女は十八で最

初の男を知つたのだ。それは戦時中、女学校の挺身隊ていしんたいで城東の皮革工場に行つていき、その工具と出来合つたのだ。間もなくその關係を先生に知られて軍需省へ勤務を變更させられ、敗戦までそこにいた。空襲のために仙三が焼け出されたので、彼女の母は石川へ疎開することになった。そのとき加代は辭職を申出たが、課長は自分の家から通うがいいといつて辭職を許さなかつたのだ。課長は家族を疎開させて、かなり大きな家にただひとり住んでいた。

加代は敗戦後もその課長の家にいた。だがある日課長は、家族が疎開先から帰つて来るからといつて、僅かの手切金で石川の母のところへ行けといふのだ。加代はそのとき素直に肯うなづいたが、田舎へ疎開した母は親戚の強制的な勧めと生活難から中農の隠居へ再婚して居り、その婚家へ行くことは、彼女に想いも及ばなかつた。彼女は汽車の切符を買いに行くといつて家を出た。そして何の当もなく新宿や銀座をさまよつた。そして日が暮れてから、彼女は母の旦那であつた仙三を思い出したのだ。すると彼女は今朝家を出るときから、心ひそかにこの仙三を当にしていたことに氣附いた。彼女は新宿から省線に乗ると、ぼんやり仙三の家に近い両国で降りた。仙三は折好く元の住所にバラックを建てて住んで

いた。仙三は加代を見ると眉をしかめたが、それでも彼女を自分のアパートに入れてやったのである。

アパートへ来てからの加代は、自分の部屋に落ちついていたことはなかった。加代にはいつも未来への漠然とした不安があった。彼女はその不安をただ漠然と堪えているだけなのだ。それは彼女の眼を見ればよく判るのだ。彼女の一重瞼は何かひどく重い感じだ。そしてその瞳には動物的な暗さが沁みついていて、だが、頬から口元にかけては幼女のようにあどけないのである。恐らく彼女が老婆になってもこのあどけなさだけは保たれるだろうと思われるのである。それだからこの顔全体は、不思議に人々を追憶的な気分にかさそうのだった。彼女の客が、殆んど二十前後の青年であることを見ても、その顔が誘惑的なのだということが判るのである。

加代の最初の客はこうだった。ある夕暮、彼女は両国の駅にぼんやり立っていた。彼女は何かを待っていた。しかし何を待っているのか自分でも判らなかつたのである。いろんな男たちが彼女を振り返った。ことに学生服を着て真新しい赤革の手提鞆をもつた青年が、長い間彼女を見入っていた。そして彼女がその青年に気附くと、青年はふいに顔を赤らめながら、まるでひきつけられるように加

代へ近附くと、

「あの、みつ豆でも食べませんか？」

となつかしそうな声のだった。それは九州から上京して来た医学生だった。今でも彼は自分ひとりで時には友だちを連れて加代のところへ来るようである。

僕は何のためにこの手記を書きはじめたのだろう。このアパートの人々の生活や気分といったものを記録しようとしているのであろうか？ 或いは一切が古くさい昔話と変らないうことか？ いや、これらの人々は僕に深い絶望を与えるのである。僕の心のなかにある或る憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だがそれが却って今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめてるのである。勿論その愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寝床へ入るときのような楽しさを与えて呉れるのである。

僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ現在が堪えがたいだけである。現在が堪えがたいからといって、希望のない者は改善など思いがけないことだ。一体何をどう改善するのか。欲望という奴は常に現実の後から来る癖に、影だけは僕たちの前に落ちているので、その影にだまされて死ぬまで走りつづけるような大儀なことはしたくないだ

けなのである。だから僕をニヒリストだと思われるのは至極道理だ。だが僕の世界中で一番きらいなものはこのニヒリストという奴なのである。ニヒリストと聞いただけで加代に感ずるような嘔吐を催すのである。僕を強いて差別づけるとすれば——僕はまた、この差別という仕事が大嫌いなのだが——ニヒリストと正反対のものである。勿論、ニヒリストの反対はローマンチストではない。その名前は誰かが考えて呉れるであろう。僕はただ堪えがたい現在に堪えているだけなのである。

2

僕は今日も重い刷毛を背負いながら、銀座の露店からこの本所の一面に帰って来た。僕は自分の恰好を名譽なものとは考えていない。罹災したとき着ていたのだという仙三のよれよれの国民服を着ているのは、それより外に着るものがないからだ。その上に古典的な泥棒然とした大風呂敷を背負って歩いている僕の姿は、とかく人目をひくらしく、附近のバラックの人々もいつとはなしに僕の名を覚えてしまっているくらいだ。そんな恰好でゆるゆる帰って来ると、珍らしくまだ暗くならないのにアパートから引上げて来る伯父の仙三に出会ったのである。

仙三は背広姿で、僕に気が附かず歩い

来るのだ。彼はひどい跛だった。だが彼の頑丈な肩や、それに つづいて いる 厚い 抑揚の ない一枚板の ような 上半身は、彼の 昔の 商売を 思い 出させる のである。彼は 仲仕から 叩きあ げて 運送店 の 主人 となり、戦時 の 企業 整備 の とき、この あたり の 小運送店 を 合同 して その 社長 に さえ なった のだ。だが、今は、この 倉庫 が 一つ 焼け 残った きり だった。しかも 彼は その 空襲 の とき、家 や 妻 だけ で なく、右 脚を 足 首から 失った のである。

アパート の あたり 一面 の 焼跡 に は、思 い 思 い の バラック が 建っ て いる。それは この た そ が れ に は、移 民 の 集 団 住 宅 の よう な 猥 雑 と 疲 勞 が 強 く 感 じ ら れ る の で あ る。仙 三 は そ の 間 を 運 河 沿 い に 橋 の 方 へ 歩 い て 来 る の だ。そ れ は 歩 く と い う よ り よ る め い て いる と い う 方 が ふ さ わ し か っ た。跛 の 方 の 足 が や っ と 大 地 に 踏 み 下 さ れ る と、彼 の 上 半 身 は 倒 れ ん ば か り に 右 へ 傾 き、そ れ を 節 く れ だ っ た 太 い 木 の 杖 で 懸 命 に 支 え な が ら 左 の 方 の 脚 を ひ き つ づ ける の だ が、そ の た め に し ば ら く 立 止 っ て い な け れ ば な ら な い の だ っ た。そ の 都 度 に、杖 が ぶ る ぶ る ふ る へ て いる の で あ る。そ し て 彼 は 不 安 そ う に、次 の 足 を 下 さ な け れ ば な ら な い 地 面 を ち ら り と 確 め て か ら、再 び 運 命 的 な 予 感 の う ち に、次 の 一 歩 が 絶 望 的 に 踏 み 出 さ れ る の だ っ た。僕 は そ の 老 人 に 挨拶 を し た。

「早いお帰りですね。品物の清算は明日にしますか？」
「うむ……」

と仙三は眉をしかめながら、僕をじっと見るのだ。彼の顔は小さいのだが、その顔とは不調和なほど高い鼻は先が尖っていて、その鼻の両側には、犯罪人のような陰険な眼が黒く澄み通っていた。頭は真白できちんと五分に刈り込み、皺もない青白い顔には、暗紫色の唇が厚く垂れていた。やがて仙三は眉をしかめたまま不機嫌そうにいった。

「うむ。金沢の息子が死んでな。今晚お通夜なのだ」

「金沢さんの息子……ああ、あの少年ですか。仕方がないでしょう」

そして僕たちは何事もなかったように、その言葉を挨拶がわりに行き違ったのだった。仙三は再び運命的な足どりで橋の方へ歩いて行った。戦時中、欄干の鉄材という鉄材をとり除かれてしまったみすばらしいその橋は、そのために空襲のとき、数十人の避難者を水の上に落してしまったのだ。仙三はその死の橋の傍に、バラックを建てて、ただひとりで住んでいたのである。

アパートの廊下にはむせかえるような煙が立ちこめていた。廊下といつてもいつもじめじめしているたたきの土間で、それが何の奇

もなくその建物の中央を縦に一筋につらぬいているだけなのだ。その廊下をはきんで大小とりまぜた部屋が十二室向い合っていて、その端の一室は炊事場と便所に仕切られている。だがその部屋部屋の構造や高い屋根裏の棟木から長く吊り下っている暗い電灯の感じや、その建物に沁み込んでいる陰鬱な調子などは、僕の服役していた田舎の刑務所そっくりで、僕が思わず仙三を「御担当者！」と呼んでしばらく気のつかないことのあるのは、僕の頭がどうかしているからではなく、全くこの建物のせいなのである。

僕は部屋へ入って、品物を仕訳しながら売上の伝票を書いた。僕は露店の売子なのである。仙三が知合から刷毛を仕入れる。それを僕が売るわけだ。そして僕は売上の一分を月給として貰うのだ。月百五十円から三百円にはなる。勿論それでは食えないから常に飢えているのである。それに僕は二、三日前に、まだ来月までには十日もあるというのに、外食券を食い切ってしまった。勿論金なんかあろう筈はない。だが小岩の刷毛屋の間屋へ品物をとりに行ったとき、その主人が僕に何となく米を一升呉れた。そして僕も何となくその米を貰って来たのだが、そのおかげでやっと今迄凌ぎをつけて来たのである。

売上の一分とはひどいと僕の隣に露店を出

しているライター屋がいう。どんなに少くとも一割が相場だと憤慨して甚だ民主的じゃないというのである。そこで僕は仕入から販売まで一手に引受けていて、僕の資本家はこの露店の権利を持っているだけという、ストライキを起して要求しろという。だが売子は僕ひとりなのである。ストライキとは同盟罷業のことだから、同盟する相手のいない僕にはストライキの仕様がないうを説明すると、怪訝な顔をして沈黙した。全く僕が飢えているといふことがそれほど重要なことなのだろうか！

今日死んだ少年も僕と同意見だったであろう。その少年は十二だった。手脚は骨ばかりで腹だけは異様にふくれていた。彼は兄のお下りらしいだぶだぶの学童服を着ているために一層瘠せて見えた。そしていつも痴呆のように口を半ばひらいているので、青白い頬は一層落ち込んで見え、そのために妙に老人くさい感じがするのだった。彼は学校へも行かずいつも廊下やアパートの附近を何の目的もなくさまよっていた。そして自分よりずっと年下の子供から「栄養失調！」と罵られても幾分斜視の首をかたむけながら、ただだまっぽんやり立ち止まっているだけなのだった。それは全く人々に白痴を思わせるほどなのである。だが先日、同じ年輩の少女から罵られ

たときは、流石腹を据えかねたと見え、傍にあった石をつかむと少女へ投げつけたのだった。石は少女の眼の上に鋭い裂傷をつくった。少女は忽ち痛みと血で狂ったように泣き叫んだのだった。その声に少女の兄がとび出して来て、その少年を音高く平手で二つ三つ頬を打ったのである。そのあいだ、少年は弁解ともひとり言ともつかない声で、

「栄養失調というんだもん」

と繰り返していたが、別に泣きもせず、物憂げな顔でのろのろアパートへ入って行ったのだった。

僕はその少年に言葉をかけたことはなかった。道で会ってもただ「もう死ぬだろう」と考えるだけだった。そして僕はその少年に堪えているだけなのだ。ただそれだけだった。

僕は品物の整理が済むと、しばらく壁にぼんやり凭れていた。刑務所にいたときの習慣でこの姿勢が一番楽なのだ。炊事場の方からは晩の支度で騒々しい女の声が聞えていた。それを蔽うように隣の荷扱夫の妻の苦しそうな咳が聞えているのだ。その妻は、一昨日から全身にむくみが来て、まるで化物のようになっていた。その瘠せてすきんだ顔は丸くなり、手脚はふくれ上って、腹は臨月の女のようになつて、女角力のような恰好で廊下を歩いて

いるのだった。

「隣のお神さんも、もう死ぬだろう」

と僕は口に出して考えた。その僕は何か堪えがたかった。そして発狂前のように後頭部に重苦しい鈍痛を感じた。僕は不安になって立ち上り、部屋のなかを歩きはじめた。すると、僕はふいに輝かしいひろびろとした野原を歩いているのだった。草の葉末が光って風にとどき揺れるのだ。僕は一本の樹に凭れながら風の音を聴いていた。だが僕はすぐ我に返った。僕は凭れていた板の壁から離れると、僕も夕飯の支度をしなければならぬと考えた。草の葉末が風に光っていたからといって今の僕に何の關係があらう。僕は食糧や炊事道具などの一切の入っているブリキ缶を両手に掲げて部屋を出た。

炊事場は帯を締める暇も、髪を結ぶ暇もない女たちで混み合っていて、四、五歳の女の児が泣き叫んでいた。炊事場の隅にある大きな木製の塵取には、白いかびが生えていて、あらゆる種類の厨芥が投げ捨てられて異臭を放っていた。一方の板壁に焼け垂鉛が張ってあって、生活の疲れを見せているさまじまな種類の焔炉が並んでいた。そして他の一方の板壁に沿って長い木の流しがとりつけてあって、それはもうぼろぼろに朽ち、いたるところから水が洩るのだった。そこに思いがけな

く仙三が杖をつきながら、フロックコートを着て立っていた。その彼の胸には勲八等の勲章が下っているのだった。そして顔をしかめながら立っている彼は、この場所では何か醜悪だった。だが彼はふいに一人の主婦へ押付けた威厳のある声でいい出したのだった。

「あんたはその大根の葉っぱを捨てるのかね？ 大根の葉っぱにはビタミンが根より多くふくんでいるのだ。それを捨てるのは全く命を捨てるようなものだ。わしは先刻もいうように単なる経済からいうのじゃない。食生活の合理化のためにいうのだ。全く大根の葉っぱは枯れたものさえ干葉といつてな、漬物にしてもうまいもんだ。それにわしは仲仕をしていたとき足を挫いたことがあったが、その干葉を入れた湯を立てて立派に直したことがありましたよ」

そしてまた仙三は、フライパンの取扱方を若い主婦に教えた。彼は右手で杖を握りしめながら、左手で器用にフライパンのなかのものをかえして見せるのだった。そしてまた彼は菜の茹で方に苦情を持ち出すのだった。僕はそのように仙三が動くたびに揺れる彼の胸の勲章を物憂い心で眺めていた。しかもその勲章は、仙三が菜を茹でている鍋の蓋をとるたびに湯気にさらされて鈍い銅色に光り出すのだった。だがやっと仙三が跛をひきながら

炊事場から去ると、主婦たちは忌々しそうに愚痴をこぼし合うのだった。

「本当に嫌ねえ。……栗原さんに炊事場へ入って来られるとぞっとするわ」

「あの人はまるでここの殿様みたいなのね。何をしても文句をいうのよ。昨日だつてうちの息子にまでお説教なんですの。お酒を飲むといつて」

僕はその女たちの間へすべり込んだ。そして昨日の残飯をフライパンで焼飯にしたのだ。僕はそれを出来るだけ不器用にやった。すると女たちは奇妙に静かになって、一人二人と炊事場を出て行ったのだった。そして遂に炊事場にいるのが僕ひとりになると、思わず僕は深い溜息を洩らしたのだった。自分自身が重かった。そして人間が重かった。帰りの廊下でおぎんに会った。彼女はひどく興奮していた。彼女は坊さんがまだ来ないといつていら立っているのである。彼女は僕までつかまえていうのだった。

「七時という約束なのに何しているのでしょうねえ。ああほんとに忙しい。堪らないわ。それに何かいつも自分のしたいことと違ったことばかりしているような嫌な気持ちで……」

そして荷扱夫の妻を見ると怒鳴るようになるのだった。

「あんた、いいの？ 寝ていなくてもいい

の？ 旦那さんに夕御飯の支度ぐらいさせなさいよ。あんたがだらしが無いから、旦那さんもだらしがなくなるのよ」

すると女角力おんぎんちきのようにふくらんでいる荷扱夫の妻は、もう涙をうかべながらいうのだった。

「戸田さん！ 昨夜、うちの人、わたしを足げりにして早く死んでしまえというんでしょ。わたし悲しくて。……御飯の支度をして呉れるどころじゃありませんよ」

「あんたの家も困ったものね。それにまたむくんどうじゃないの？」

「ええ、戸田さん、見てお呉んなさい。またこんなにくれたんですよ」

そして僕がいるのに荷扱夫の妻は、恥もななく前をまくりながら腹部を見せるのだった。その腹部は異様に大きく膨満ふくれしていて、そのために局部さえ見えなくなっているのだった。

僕は最後の食事をすませた。明日はもう米もないのだ。しかしそれが何であろう。僕は読経が聞えはじめたので少年の部屋へ行つた。葬式らしい飾りつけもなく、棺さえないのであった。少年は薄い蒲団かまくらのなかに低くなって居り、その顔には洗いざらしの配給の手拭いが載せてあった。その前に小さなちゃぶ台が置いてあり、その上に、花や線香がならん